

問答

アリスと学ぶ FXの知的投資術

FXドットカメラとの遭遇

ある秋のうららかな日曜日の午後、アリスは川辺の土手に腰をおろして空を眺めていた。川向こうの時計台が午後3時の鐘を鳴らした。空の雲が少しずつ形を変えながら流れていく。「まあ、あの雲はまるで亀さんみたいな形になったわ」と思った瞬間、アリスの目に信じられないような光景が飛び込んできた。頭に鉢巻をした大きな亀が川に向かって二本脚で走っていく。

アリスは驚きのあまり声も出ない。「なんで亀が二本脚で走るの？まるでアニメに出てくるニンジャタートルみたいじゃない……」

亀の甲羅には「FX」という文字が大きく書かれている。アリスは立ち上がり、後を追った。亀は川辺まで来ると、どぶんと水に飛び込んだ。

だ。アリスは亀が飛び込んだ位置から、水の中をのぞきこんだ。水中に何か光っているのがみえる。その光をみつめていると、アリスは頭の中が朦朧としてきた。意識が薄れ、体がぐらりと揺れた。「あぶない、川に落ちる！」と感じた次の瞬間、頭から水の中へ転落した。アリスは気を失った。

気がつくと、さっきの鉢巻をした亀がアリスをのぞき込んでいる。鉢巻にも甲羅と同じ「FX」の文字が書かれている。周囲の風景は一変していた。川原は消え、周りは大海原だ。遠くに小島がいくつもみえる。アリスと亀がいるのは海の真ん中にちよんこんと浮いたような畳6畳ほどの小さな島だった。

「こりゃあしまった。お嬢さんを巻き込んでしまった」と亀が言う。アリスは起き上がり、亀に尋ねた。「亀さん、ここはどこ？何が起きた



たけなか まさはる
竹中正治
龍谷大学教授

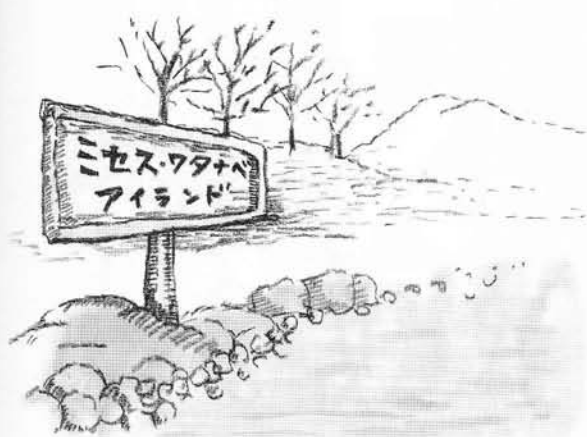
挿絵 tomosuke

の?」

「ここはFXワールド、無数にある並行世界の1つさ。私がお嬢さんのいた世界からこちらの世界に移った時に、うっかりお嬢さんを巻き込んでしまったようだ」

「並行世界? 小説『ライラの冒険』に不思議なナイフで空間を切り裂いて別の世界に出入りする話があったわね。でも、それは空想の話だと思っ

ていたわ。私は元の世界に戻るの?」
 亀が答えた。「大丈夫、この島は『亀裂の島』と呼ばれていて、24時間後に元いた世界への時空の亀裂がまた開く。それまで待たなくてはならないが、まあ、せっかくだから、このFXワールドを見物して回るか



い?」。亀はザブザブと海に入ると、アリスにさあ背中に乗れと指でさした。「まるで浦島太郎ね」と思いながら、アリスは亀の背中に乗って尋ねた。「私の名はアリス、亀さんの名は?」

「名はFXドットカメだ。『ドット』と呼んでおくれ」

ミセス・ワタナベの島

ドットの背中に揺られて1時間ほど海原を進むと別の小島がみえてきた。岸には「ミセス・ワタナベ・アイランド」と立て札が立っていた。島に上がると矢印のついた看板が目に入った。

矢印の方向に目を向けると、丘の上に家が見える。アリスとドットはその家まで歩き、ドアを叩いた。家の中から「お入りなさい」と声がしたので、アリスはドアを開けて言った。「こんにちは、あの、初めての者なんですが……」。家の中でパソコンのキーボードを叩いていた中年のおばさんが、手を止めて振り返った。「ああ、あなたもFXを始めたのね。あたしがどうやって何億円も稼いだのか知りたいんでしょ? いいわよ。教えてあげるわ」と勝手にしゃべり始めた。

「最初は500万円ほど用意したの。手元資金がなければゲームはで

もうけが膨らんだのよ」



きないでしょ。それをFX業者に証拠金として預けて、外国通貨を買うのよ。証拠金が増えて、損すると減る。最低必要証拠金を維持できなくなったらゲームオーバーよ」

「できるだけ高金利で相場の上がりそうな銘柄を選んで買うのよ。そうすると円との金利差が『スワップポイント』として証拠金に加算されていくわけ。私は最初、オージー（オーストラリアドル）を買って、円を

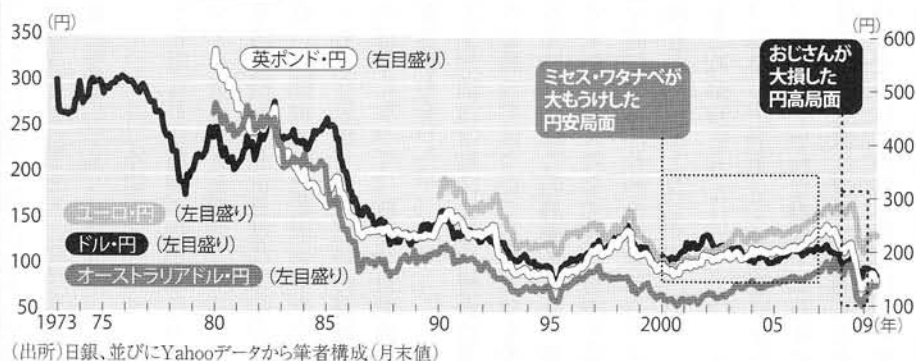
売ったわ。200万ドルほどね。オージーは円よりずっと高金利だし、資源国通貨だったことで、相場は上が

ったわ。最初成功すればあとは簡単よ。ほかにも高金利通貨があるでしょ。米ドル、ユーロ、英ポンドなんかも増えたお金でどんどん買ったのよ。あとは雪だるまが転がるように

ああ、私の可愛いオージーちゃん、

んだ風景が広がっていた。島の真ん

図 主要通貨対円相場



(出所)日銀、並びにYahooデータから筆者構成(月末値)

もうけが膨らんだのよ」

アリスは口をはさんだ。「あの、でも、外国通貨の相場が下がるってこともあるんでしょ? 昨年から円高で高金利通貨の為替相場が急落したって聞きましたけど……」。

ミセス・ワタナベは言った。「あら、あなた多少は知っているのね。あたしの成功を妬んで『始めたタイミングがラッキーだったただけ』なんて言う連中もいるのよ。そりゃあたしだって負け知らずってわけじゃないわよ。そうね、確かに昨年の後半は円高でへこんだわね」。

「でもね、すぐに取り返すわよ。みなさい、これオージーのチャートよ」

用語説明

チャート(野線…過去の相場の推移をグラフ化し、売買の指針(買いシグナル、売りシグナル)を抽出する手口。移動平均線、ローソク足、ポイント&フィギュアなどの方式でチャートを描き、売買手口を導くさまざまな手法がある。これらはテクニカル分析と総称される。

ミセス・ワタナベはパソコンの画面に映った相場のグラフを指で叩きながら言った。「チャートってみるのは初めて? 相場のグラフよ。ほら一番最近の動きをみてちょうだい。底を打って上がり始めているでしょ」。

ああ、私の可愛いオージーちゃん、どんだん上がれ、天までとどけ!」。

そんな調子でしばらくの間ミセス・ワタナベは一方的にしゃべっていたが、アリスの顔をまじまじとみながら言った。「お嬢さん、あなたけっこう可愛いルックスしているわね。雑誌で『わたしも始めましたFX』っていう連載をするんだけど、そのグラビアアイドルを探しているのよ。あなたやる気ない?」。

「グラビアアイドルって水着姿でセクシーポーズしたりするんでしょ?」

「あら、うちではそんなことまではしなくていいのよ。ミニスカートでチラチラとやって、ニコニコとして『わたしもFX始めました』ってやればいいのよ。簡単でしょ」

「でも、わたしはそういうのはタイプじゃないので……」

アリスは腰を上げた。「そう残念だわ。まあ、いいわ。ほら、私の名刺と本をあげるわ。気が変わったらいつでも連絡してね」。ミセス・ワタナベはそう言って、『あなたも目指せ、FX億万長者』というタイトルの本をアリスに渡した。

負けの込んだおじさんの島

ドットの背に揺られて次に着いた島は、立て札もなく、ちよつとすさ

んだ風景が広がっていた。島の真ん中にある家の壁はペンキが剥げ落ち、ゴミが散らかっていた。家の隣には畑が広がっていたが、雑草が生い茂っている。

開いたままのドアから中をのぞくと、男が1人パソコンのあるデスクに突っ伏している。「あの、お邪魔致します」とアリスが声をかけると、男はむっくりと顔を上げた。無精ひげを生やした中年のおじさんだ。目の周りにはクマができていた。男は疲れた感じで言った。「なんか用かい?」。

「旅の者ですが、この島で何か悪いことでもあったんでしょうか?」アリスが言うとうちは答えた。「ふん、最悪の展開だ。FXで高金利通貨を買ったと金利差と円安でもうかるというから俺もやってみたんだ。最初はちよつともうかったぜ。ところがどうだ、1200円でドルを買ったら、あつという間に20円も下がった。でもここで損切りしたんじゃ男がすたるところで、思い切りなんびんしたんだよ」。

用語説明

損切り(そんぎり)……「ロスカット」とも言う。相場が不利に動いて損失が出た持ち高(取引残高)を処分すること。また、相場が特定の水準まで下がったら自動的に売る注文、ある

いは上がったら買う注文のことを「ストップロス・オーダー（逆指し値注文）」と呼び、損切りに利用される。

なんびん：買って相場が下がった時にさらに買い増す、あるいは売って相場が上がった時にさらに売って持ち高を増やすこと。

「そしたらどうだい。昨年9月のリーマン・ショックとかで、1ドル＝100円も割れてドル急落さ。ほかにも買って持っていた英ポンドやオージーもみな急落、預けていた証拠金は全部なくなつて、取引は自動的に清算されちゃった」

アリスは気の毒に感じて何か励まそうと思つて言った。「まあ、でもおじさんにはまだこの島があるじゃないですか。手入れをすればもつと綺麗な島になるんじゃないかしら。広い畑もあるし……」

ところがおじさんは言った。「ふん、島なんかかまってる暇はないね。おれがやられたのは100年に一度の金融危機に運悪く遭遇したからだ。だからこの島を担保に金を借りた。これを元手にこれから取り戻すんだ。金利差だけを手掛かりにもうけようとしたのが間違いだつた。チャートの勉強もしたぞ。チャートの売買シグナルをみながら、損切りは浅く、利食い大きく」だ。海外

の相場も追いかけて、取り戻すぞ。急におじさんの目はガラガラしてき

海原でのドットとアリスの会話

アリスは次の島に向かう途中、ドットの背中でミセス・ワタナベがくれた本を開いて読んでみた。「ドット、この本にあのおじさんが言っていた『損切りは浅く、利食いは大きく』の原理というのが書いてあるわ」

『相場が不利に動いた時の損失を小さく限定するためにはストップロス・オーダーを使います。例えば外貨を買ったら、買ったレート（持ち値）から50銭下にストップロス・オーダーを置くようにします。そうすれば、100万ドルの買い持ち高でも損失は50万円程度で済みます。反対に利食いはじつところえて相場が何円も有利に動くのを待ちます。これを繰り返せば損を小さく限定し、儲けは大きくできます』

「ふん、ドット、どう思う？ これって正しいかしら？」
ドットが答えた。「一見もつともらしく感じるね」。

しかしアリスは釈然としない。「でも50銭ぐらいの小さな相場の変化は大きな相場の変化よりも、何倍もの

頻度で起こるわよね。5円も上げることに1回成功しても、50銭での損切りが10回発生していたら、損得ゼロでしょう」。

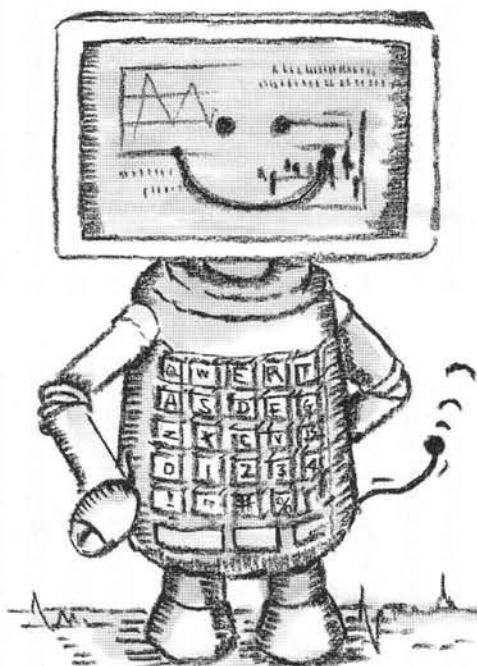
アルゴリズムの島

次に訪れた島は、コンクリートで固められており、ケープルやさまざまな電子機械類が並んでいた。「アルゴリズム・アイランド」という標識がかかっている。上陸したアリスの目の前にパソコンに機械の手足をつけたようなミニロボットが現れた。「まあ、かわいいロボットね。話ができるかしら？」とアリスが言うと、ロボットは「オンセイ・タイオウ・カノウデス」と答える。「旅の者です

が、よろしければ、この島のご主人のところにご案内いただけるかしら？」と頼むと、ロボットは「アルゴリズム・トレーディング・システム・マザー・ノモトニ、オツレシマス」と返事した。

島の中央に近づくにつれ、道の左右は電子機械がビルのように立ち並び、目の前に高い塔がみえてきた。ドットが言う。「あそこがこの島の中心マザーの管制塔だよ」。

アリスがドットに尋ねた。「アルゴリズムってどういう意味なの？」。「もともとの意味は計算の規則という意味だが、人工知能による自動トレーディング・システムのことをアルゴリズム・トレーディングと呼んでいるのさ」



「へえ、人間じゃなくてコンピュ

っていたけど、マザーのような人工

「その通り。その結果、本当に明日

より大きいと思えるなら買うし、反



「へえ、人間じゃなくてコンピュータが売買しているの？」

「そうだ。最近の人工知能はすごいよ。電子メディアで送信されるニュースや経済統計データの発表を自分で解釈して、ものすごい速さで売り買いをする。そういう売買をすればもうかるかも人工知能が自分で学習するそうだ。しかも機械だから24時間休みなしで売買しても疲れるということがない」

島の中心の巨大な塔の中に入ると、壁には大中小のたくさんのスクリーンが並び、さまざまな相場が映し出されていた。目の前にある一番大きなスクリーンには、数字や文字が高速で流れている。とても人の目では追えない。

その時、ブザーが鳴って、スクリーンの数字と文字の流れが一段と速くなった。「何が起こったの？」。アリスが声を上げると、マザーが答えた。「今、重要な経済指標が発表された。予想よりも景気の悪化を示す結果だった。私が市場に出ていた買値をすべて叩いて売ったので、相場が下がり出したのだ」

アリスが尋ねた。「その経済のニュースが出てから売るまでに何秒かつたんでしょうか？」

「0・0015秒だ」

アリスは思った。「あの気の毒なおじさん、短期売買でもうけるって言

っていたけど、マザーのような人工知能が売買する相場で勝ち目があるのかしら……」

仙人の島

次に美しいサンゴ礁に囲まれたヤシの木が生い茂る島に来了。栈橋の上で麦わら帽子をかぶった老人が釣り糸を垂れていた。白いあごひげが腰まで伸びている。ドットがアリスに言った。「この島の主は『仙人』と呼ばれている方で、はるか昔から相場をみてきた人だ。何でも聞いてごらん」。

アリスは老人に近づいて尋ねた。「仙人のおじいさま、別の世界からやって来たアリスと申します。ずっと昔から相場を研究されてきたそうですが、明日の相場や来年の相場もお見通しなんでしょうか？」

じいさんはにっこりほほ笑んで答えた。「お嬢さん、もし私が明日のドル相場が上がるとわかるとしたら、何をするとと思う？」

「当然、ドルを買うでしょう」

「そうだ。それで明日のドル相場がわかる私がドルを買っているのをみたら、ほかの皆はどうする？」

「やはりきつとあわてて買うと思います。あるいは売ろうと思っていた人たちは明日まで売のを待つでしょう」

「その通り。その結果、本当に明日のドル相場は上がるのかのう？」

アリスははっと気がついた。「明日はドルが上がると信じて、みんなが今日ドルを買えば、明日は売るチャンスを狙う人ばかりになるわ。だから明日のドル相場は上がらない。反対に下がるってことね？」

じいさんは答えた。「その通りだよ。明日ドルが上がると言う私の予想はみごとに外れるんじゃない」。

「高金利通貨に投資すればもうかる」は本当か

アリスはミセス・ワタナベがくれた本を開いて尋ねた。「高金利通貨に投資すると長期的には低金利の円で持っているより金利差の分、もうかると書いてあるんですが、本当でしょうか？」

じいさんはホッホッと小さく笑って答えた。「もしそれが本当ならば、みんな円を売って、高金利通貨を買うはずじゃ。その結果何が起こるかのう？」

「高金利通貨の相場は上がります」

「その通り。相場が上がればいずれ割高になる。すると次にどうなる？」

アリスは少し考えてから答えた。「割高になれば将来下落する確率が高くなるということですか？」

「その通りじゃ。金利差でもうかる益が、将来相場が下落して生じる損

より大きいと思えるなら買うし、反対に金利差の益より将来の相場下落の損が大きくなると思うなら、買うのは止まり売られる。このことが何を意味するかわかるかのう？」

「うーん、相場は金利格差の損益と将来の為替相場の変動による損益がちょうどプラス・マイナス・ゼロでバランスする水準におさまるということでしょうか？」

「正解じゃ、上出来だ」

「でもおじいさん、実際には為替相場はとても円安になったり、反対に大幅に円高に動いたりしますよね。こういう変化はみな金利格差の変化で起こっているのでしょうか？ 為替相場の変動は金利の変化に比べるとずっと激しくみえるんですけど？」

ブームと破裂を繰り返す高金利通貨

じいさんはアリスをしげしげとみながら言った。「アリスや、きみは本当に賢い娘だね。その通りだよ」。

「為替相場を変動させる要因は金利だけじゃない。ほかの国よりもある国の景気が良くなりそうだと、株価が上がると、貿易黒字が増えそうだと、などさまざまな原因で短期の相場は変動する。しかしそもそも為替相場というのは、異なった通貨の交換だ。ある通貨の価値が他の通貨に



対して増価するとその通貨の為替相場も上がる。では通貨の価値とは一体なんじゃ？」

「えっ、通貨の価値ですか？ お金自体には価値はないわ。お金は商品を買えるから価値があるだけですよね」

「その通り。通貨の価値とはそれとだけ商品を買えるかにかかってる。それを通貨の購買力と言う。ある通貨の購買力の増価は長期的にはその通貨相場の上昇になるのじゃ」

アリスはさらに尋ねた。「でも購買力の変化ってどうやってみればいいのかしら」(112頁参照)

じいさんは説明を続ける。「通貨の購買力の変化はインフレ率の逆数じゃ。つまりインフレ率の高い通貨は低い通貨に対して購買力が減少する。その結果、長期的には相場が下がるんじや。ところが、現実の為替相場は購買力の変化に見合ったようなおとなしい変動はしてくれない。短期の為替相場はさまざまな原因に

よって購買力の変化から大いに乖離する」。

「例えば、金利差があれば高い投資リターンが得られると信じて、高金利通貨に投資するブームは過去何度も起こったことなんじやよ。ブームの時には皆が買うので高金利通貨の相場は上がる。相場が上がるのでさらに買うということが繰り返される。しかし、いずれ割高な水準を維持できなくなり、下落し始める。すると今度は損失を避けるために皆、われ先に売ろうと殺到するから、相場は大崩れになる。そういうブームと破裂を繰り返してきたのが為替相場なんじや」

アリスはうなずいた。「そうすると、ブームが破裂して相場が大崩れた時に外貨投資を始めれば、もうかる確率は高くなるとも言えますね」。

じいさんは言った。「そうじやよ。でもそんなに簡単なことじゃない。為替相場が購買力に比べて割安か割高かはおおむね判断する方法がある。しかし、上がる相場のどこが天井か、下がる相場のどこが底値か、事前にはわからないからのう。割安だと思つて買つても、もつと下がるかもしれない。だから短期の利益を追わずに、投資資金を分割して買い下がる必要がある。しかし、その時には評価損が出る。その評価損に耐え

て長期投資に徹する覚悟がなければ、成功はできない」。

じいさんの説明を聞きながら、アリスは相場というものが少しわかってきたような気がした。

アリス、家に帰る

ドットが言った。「アリス、そろそろ戻る時間だよ。今から戻ればちょうど間に合うはずだ」。再びドットの背に乗って海を渡りながら、アリスはドットに尋ねた。「ところでドット、あなたはこのFXの世界で何をしているの？」。

ドットはへへへと笑いながら答えた。「わたしは自分の名前の通りFXドットカメラというFXトレーディングの会社を経営しているんだ。ミセス・ワタナベも、おじさんも、皆わたしのお客さんだよ」。

「まあ、そうだったの。アルゴリズムの島の人工知能マザーとはどういう関係なの？ やけに詳しかったようだけど」

「わたしのたくさんのお客さんたちの売買注文は、全部インターネットで瞬時にマザーにつながれているんだ。お客さんらの売買を引き受けながら、マザーはこの世界の大きな外為市場のたくさんの相手と売買を繰り返しているのだよ」

亀裂の島に戻ると島の中央に不思議な光の輪が輝いていた。ドットが言った。「さあ、アリス、光の輪に向かって進むんだ」。

アリスは光の輪に足を踏み入れる直前に振り返って手を振った。「ドット、さようなら、面白い旅行だったわ」。

ドットもアリスに手を振って言った。「機会があれば、また会おう！」。光の輪をくぐった時、再び意識が遠のき、アリスは気を失った。気がつくともういた川辺に横になつていた。川の向こうの時計台の針は午後3時10分を指していた。「たった10分しかたつていない。夢のようだよ」。

家に帰るとアリスの父がパソコン相手になにやら少し興奮している。父が言った。「ようし！ これでインストール完了だ。これからFXトレードががんももうけるぞ！」。父のパソコンの脇に1冊の本が置かれていた。その本の表紙をみてアリスは「あっ！」と声を上げた。本の表紙のタイトルに「あなたも目指せ、FX億万長者」と書かれていたからだ。「お父さん！ ちょっと待って！ お父さんは何もわかっていないと思うの……」

父はムツとして言った。「ほう、わが家の娘は最近急に賢くなったようだね。親に向かって『何もわかっていない』と言い放つとはね！」